2016.4.17　復活節第４主日

わたしの羊はわたしの声を聞き分ける

ヨハネによる福音　10:27-30

そのとき、イエスは言われた。わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。わたしと父とは一つである。」

説教

復活節の最中に、まして礼拝の説教で無粋なはなしをもちだしてわるいなあと思いますが、きょうの福音と同じように短く済ませます。

＜一元論と二元論＞

ヨハネ福音は二元論っぽいといわれることがあります。 それは善と悪を対比して語るからでしょう。「光と闇」「滅びと永遠の命」など「良い⇔悪い」という対比で福音が語られます。

きょうの福音にある「わたしの羊」という比喩はわたしの羊でない羊に対応します。この羊のたとえはイエスに従うもの、つまりキリスト信者をたとえています。

１．イエスの声を聞き分ける羊（人たち）

２．わたしは「わたしの羊」を知っている、言い換えるとイエスが見分ける羊（人たち）です。

これが「わたしの羊」の特徴です。そうかわたしたちクリスチャンはひつじちゃんか、と思うとちょっといい気分になります。（もし、このたとえが羊ではなくねずみだったら別の感じになってしまうのですが）

＜永遠の命＞

わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。ヨハネ 10:27

きょうの福音には直接は書いてないのですが、どうも「わたしの声を聞き分けない」羊もいるらしい。そして、聞き分けのない羊のことはわたしにはお見通しだし「わたしは知らない」とイエスは突き放しているようにも読み取れます。このようにも読めるのでヨハネは二元論だといわれます。信じる人はいい人です、そうじゃない人はしりません、というシロクロをはっきりつける考え方が二元論の特徴です。（第一朗読の使徒言行録ではアンティオキアでパウロとバルナバがみ言葉を拒むユダヤ人に向かって「永遠の命を得るに値しない者」と啖呵をきってユダヤ人に迫害される様子が書かれています）

あまり単純化していい、悪いで分ける考え方を二元論だと決め付けるのもなんなんですが、この二元論をふきとばしてしまうみ言葉はなにかというと「永遠の命」です。いい悪い、善と悪をふっとばすような爆発力がこの永遠の命にはあります。

いまの浮世があまり恵まれていないのでこの調子が永遠に続くとなると遠慮したい、勘弁してほしい。（わたしもそうなんですが）いまがまさに天国だ、と実感できるなら永遠の命がほしいとおもいます。しかし、生きている実感として住みづらい世の中なので素直に喜べないところが出てくるわけです。じゃあまず悪い羊にならないように心がけようか、せめて毎日聖書を読もう、と短絡的に結論すると、これがよい羊になる道ではないというところをヨハネ福音は教えているような気になってきます。

> **神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**ヨハネ 3:16

あるひとたちはこのヨハネ３章 16 節こそが聖書の中の聖書だといいます。

（余談ですが、主人公の車のナンバーが 316 だったアメリカの映画を見たことがあります）

一人ひとりの顔が違うように、福音の受け止め方もその人、その人で違ってきて当たり前だとおもいます。どうぞきょうの福音から神が与えると約束された「永遠の命」についておもいをめぐらせて下さい。